

## 大村神社のオオムラザクラ

大村神社前の桜の木のうちの 2 本は、オオムラザクラ（学名：Cerasus serrulata 'Mirabilis'）であり、これらは 1941 年に大村神社の境内で最初に見つかった新しい品種である。植物学者兼教師である外山三郎（1902-1986）が大村神社の境内で八重咲栽培品種であるサトザクラの花を見ているときに、そのうちの 1 本の木についた花の中に、変異だと思われるものに気付いた。もっと近づいて見ると、完全に異なる桜の木の品種だということが分かり、その後、見つかった市の名前にちなんで名付けた。

最もみられるソメイヨシノ（学名：Prunus x yedoensis）の花には 5 つの花弁がついているのに対し、オオムラザクラの花は、1 つあたり 60 から 200 ほどの密集した花弁がついている。その花は比較的大きく、直径 3～5 センチ、花弁の色は淡いピンク色で、先端の色が薄くなり、ほとんど白色になる。

大村公園には約 300 本のオオムラザクラの木があり、これらはすべて原木から繁殖させたものである。3 月下旬から 4 月上旬にかけて、大村公園で桜を見るフェスティバルが開催される。本社拝殿前のオオムラザクラの木は、その品種の代表標本に選定され、国の天然記念物とされている。